



お江戸舟遊び瓦版 244号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり
お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

玉川寛治「製糸工女と富国強兵の時代

生糸がささえた日本資本主義」新日本出版社 2002

はじめに：

明治初期、日本は富国強兵を目指し、殖産興業を展開した。それは、強力な陸海軍・警察と軍需工業を築きあげるために、製紙業と綿紡績業の育成・保護をもって開始された。その中で、蚕糸業の果たした役割は、際立って大きく、富国強兵を支える外貨獲得の役割を1930年代まで担い続けた。生糸や絹紡糸など蚕糸類が商品輸出額に占める割合は、明治維新からの10年間の平均は50.5%と高く、それ以降も高い水準を維持し、1921～1951年平均で38.2%を占めている。全農家に占める養蚕農家の割合は、1905年から10年間では27%、史上最高を記録した1929年には39.8%にも達している。日本の耕地の1割弱、畑地の2割が桑園であった。

富国強兵をめざした日本の発展を支えた第一の推進力が、養蚕農民と製糸工場で働く農村出身の若い工女であったと言っても大袈裟ではない。1960年代以降、急速に衰退した蚕糸業は、2000年には蚕糸農家数3280戸、製糸工場で働く従業員は300人となっている。

今書き残しておかなければならないという強い思いにかられてこの本を書くことにした。

1. 製糸工女の一生

筆者が働いていた会社は、不朽の名著『女工哀史』の著者細井和喜蔵と、その完成のために献身した内縁の妻高井としをが働いていた会社であった。先輩からは「細井さんは物静かな人だった、クリスチャンのようだった」と聞いたことがある。

筆者の義母は、岐阜の山村で生まれ、小学校を卒業後諏訪の製糸工場に働きに出た。寄宿舎から出て、朝暗いうちから夜遅くまで働いた。一所懸命働き、休みに遊ぶ。稼いだ金と土産を持って帰る時の嬉しかった思い出は繰り返し話してくれるが、つらさはほとんど語らなかった。

3. 蚕病から始まった日本の蚕糸業

日本の養蚕・製糸・絹製織は弥生時代の後期に始まり、古墳時代には高度な技法で製織が行われていた。奈良県の藤の木古墳の棺内の多量の繊維は95%が絹で、残りが苧麻であった。江戸時代までは、絹は支配階級や豪族などの富裕層のもので、庶民は大麻や苧麻が主な原料であった。

1840年ころからヨーロッパの主要な養蚕国であったイタリア、フランス、スイスなどで、蚕の病気が流行し、1868年には、イタリア、フランス両国の養蚕が全滅の危機に瀕することになった。両国は、健全な蚕種を求めてアジア諸国にも探索の手を伸ばした。その時期を見計らったかのように幕府は、1859年（安政6年）開港を行い、蚕種の輸出が始まった。日本の蚕種は品種が優れていたわけではなく、明治20年代には輸出はなくなった。

4. 官営富岡製糸場から始まった工場制度

明治政府は、製糸工業を輸出基幹産業として急速に育成するために、本格的な機械製糸工場の建設を企画し、フランス人プリユナを雇って300釜製糸工場の建設を始めた。プリユナは自国から熟練製糸工女を呼び、日本人工女に直接製糸技術を伝授したことは、日本の発展に大きな効果をもたらした。富岡製糸場に資本主義的大工場制度が導入され、最新の機械設備、工場建物、



原動機、工場用水取水等のハード面と、操業方法、工程管理、品質管理、労務管理、養成教育、寄宿制度、賃金形態などソフト面の導入も行われた。

富岡製糸場は、製糸技術を伝習しようとする者に開放され、全国各地から製糸工女を集め、フランス人工女が技術指導を行った。作業中にお喋りすると厳しく注意され、日本ではじめて規律ある女性工場労働者がつくりだされ、そこから芋づる式に日本中に広がった。

6. 繰糸工女の出来高賃金制の本質

繰糸工女の出来高賃金制度は、女工間の競争を激化させ、作業能率を高め、製糸家は賃金コストを極度に引き下げることが出来た。賞罰採点式繰糸工女の出来高賃金制度は、工女全員に対し、技量を向上し、一所懸命働くならば人より高い賞金が得られ、サボっていると罰金を科すという制度であった。

7. 製糸工女は毎日 16 時間働いた

明治初期に政府が導入した官営工場の労働時間は、イギリスやフランスの週休制で 10 時間労働制を採用した。しかし、製糸工場が全国に広まると、無制限の長時間労働に変わっていった。『職工事情』によると 14 時間から 16 時間も報告され、休憩は 1 時間、休日は月 2 回が多かった。

9. シラミが嫌だった寄宿舎の暮らし

工女とシラミの関係は、過酷な寄宿舎と切っても切れない関係にあった。一人当たりの寝室の広さは畳 1 枚。二人に一つの布団。繰糸工女の労働は、過密労働で、劣悪な寄宿舎の生活は結核蔓延の温床となり、精神病患者多発の原因にもなった。

1 1. おくれた日本の工場法

西欧諸国から工場制度を導入して立ち上げた官営工場は、西欧の工場法にならい 10 時間労働制を採用したが、1883 年に渋沢栄一等が開業した大阪紡績会社は、深夜業を実施し、長時間労働は全面的に普及した。日本の繊維産業が資本主義的生産様式として確立する過程は、年少女性労働者に対する長時間労働と深夜業を、何の法的規制もなく野放しで広げた。マルクス (1818~1883) は「標準労働日の確立は、資本家と労働者の数世紀の闘争の成果である」と述べているが、日本では遅く、1911 年にやっと制定されている。

1 4. 大恐慌と工女たちのたたかい

1929 年の大恐慌は蚕糸業に大打撃を与えた。日本最初のストライキは 1886 年甲府市の製糸工場の 100 人の工女の同盟罷業と言われている。ストライキの多かった年は、ロシア革命の 1917 年、金融恐慌の 1927 年から 1931 年である。亀戸の東京モスリン、東洋モスリンは、繊維労働史上に残る大ストライキが繰り返し行われた。

所感： 日本資本主義を生糸が支え、戦前までの中心的な産業であったことを知っている人は少なくなっている。筆者の生まれた江東区亀戸地区には、明治末期に、日清紡績、松井モスリン、東洋モスリン等をはじめとして紡績業、織物業、60 社を超える染色業者が経営していたことが『明治 42 年工場通覧』に記されている。それらの産業は日本各地に広がり、繁栄の一方で、厳しい労働環境が発生していった。亀戸地区は大正 2 年には東洋モスリンの 3000 人の女工さんの待遇改善ストライキがあり、労働運動の先進地域になっている。貴重な地元の社会文化史である。

名著『女工哀史』は著者細井和喜蔵が勤務していた亀戸で書き始め、関東大震災で中断するも、1913 年に完成している。これらの産業を底辺で支えた女子労働者の過酷な生活を自らの体験と調査に基づいて克明に記している。女工哀史に描かれた内容の多くを提供し、執筆に向かう和喜蔵を支えたのは妻としをであった。直接手にとって、一読されることをお勧めしたい。

どんな産業にも栄枯盛衰があることを痛感させられる。現在の中心産業である自動車や電機、原子力も今後の世界的な産業経済構造の変化の中で変動していくことが推察される。

環境にやさしい、農林水産業をベースにした平和な海洋観光立国を夢見て。 (文責 中瀬)